

ふみの会 ニュース

- 発行 　ふみの会広報部
■発行日 　2006年9月30日
■連絡先 　藤川博樹
　　　　　〒115-0045
　　　　　東京都北区赤羽1-48-3-203
　　　　　tel03-5249-5797 fax03-3901-6090
■編集 　中井、塚原、藤川、蒲原雅、佐藤、蒲原直
　　　　<http://www.mdn.ne.jp/~fumi/top.html>

No.297

10月行事日程

■ニュース編集

原稿はテキストにして下記へ
ワード・一太郎文書も可
kamo@sun.email.ne.jp
エッセイ：5枚（2000字）
小説：10枚（4000字）目安

■締め切り

10月22日（日）

■年会費

1200円（年）
切手80円×15枚
郵便振替：東京00170-1-18290



◆Sさんが別途揭示板で、私が今日撮ってきた上の写真を分
かりやすく以下のように解説してくれている。

「本日のT氏絵日記はオオシオカラトンボの写真だった。世田
谷ではあるがその撮影個体の近くに池か沼か湿地か水田かゆる
やかな流れの溝川があるはず。シオカラトンボは明るくひろび
ろとした水域が好きではあるがオオシオカラトンボはややうす
暗い小水域を好むとされる。そしてシオカラトンボとオオシオ
カラトンボは明確に棲み分けていることが観察されている。成
熟成虫の♂と♀は色具合が全く異なるので識別は簡単。♂はそ
の写真にある個体の色具合。♀はシオカラトンボの♀（いわゆ
るムギワラトンボ）に似ている」

◆「ゆるやかな流れの川か溝川があるはず」とは凶星です。
写真のすぐ横を、通称丸子川という溝川が流れているのです。
丸子川とは有名な「六郷用水」の別名で、もう少し下流に行っ
て大田区に入ると現在でも「六郷用水」呼ばれて親しまれて
います。江戸の初期に作られた灌がい用の用水路で、狛江
市あたりの多摩川から取水したそうです。現在は事実上、と
ころどころで寸断されていて側溝だけが残っているのですが人
工的に通水しているのです。世田谷部分も治太夫堀と呼ばれ
て残されているところがあり、ここだけはきれいに整備され観
光名所となっております。

◆こうして多摩川本流に沿って世田谷を通し、えんえんと大田
区の池上、蒲田方面まで流れ江戸湾に注いでるわけですが、当
時大田区は天領で、天領の田を潤すためだけが目的で作られ
た用水路とのことで、世田谷地域にはなんの恩恵もなかったそ
うです。そうした事情からか、大田区の六郷用水は保存史跡
として区を挙げて整備が進みましたが、私の住んでいるあたり
は丸子川という名が示すように、ただの溝川です。暗渠にされ
ていないのが、まだしも幸いで、トンボやその他の昆虫も結構
生息しているようです。（T）

小説

一人ぼっち

内田幸彦

(六) 塾通い

彦一は、とうとう母の同僚の東田先生の所へ強制的に習いに行かされることになった。

行ってみると、同級生の高井君がいた。

「おや外田、お前も習いに来たのか？ 東田先生は姉婿なんだ」と得意気に言った。

高井君は一寸、頭を触つても泣く、泣き虫だが、算術と絵が特別に上手な子だった。先生が身内という優越感と、算術が出来ることから、新入りの彦一を見下し気味だった。

学校の試験を先生に返して貰うと、「先生、理科の試験を返して貰いましたが、少し悪くて八九点でした」「美術は思った通り一〇〇点でした」と鼻をうごめかす。

彦一は耳が痛い。美術は良くて四五〇点。悪くすると一五点から二〇

点。名前の書き賃くらいしかない。最も不得意な学科だった。試験を返して貰う毎に当てこすりで頭に来る。《よし、今に見ておれッ、一泡吹かせてやろう》と肚に決めてチャンスを待った。

明日からは夏休み。最後の大掃除をして四〇日間の休みに入る。海も、山も、川も招いている。彦一の後、三人目に高井君が座っているから、大掃除は一緒の斑だ。

窓ガラスを拭く者、床を掃く者、雑巾がけする者、甲斐がいしく働いている。教室のゴミ箱は大きい。高さ一メートル、幅五〇センチはあるから、坐れば子供一人は十分に入る。彦一は悶（ひらめ）いた。《このゴミ箱に抛り込んでやるッ!》

「高井君、来て見る。アレ何だろ、変な物がある?」

雑巾がけをしていた高井君は、うっかり乗って走って来た。

「何ッ、何があるの?」
ゴミ箱を覗き込んだ瞬間に、彦一は

高井君の両足を抱え、頭を下へゴミ箱の中へ真逆さまに落とした。

すかさず彦一は蓋をして、出られないよう、その上に重し代わりに自分が乗った。死に物狂いの高井君は中でドタバタ暴れている。二、三分も経つたろうか、窒息しても困るので、ヒョイとゴミ箱から跳び降りると、蓋が飛び、涙と汗と鼻汁を埃まみれにした高井君が号泣しながら這い出し、掃除も済んでないのに、わあッと声を上げ、家へ逃げ帰ってしまった。彦一は《ざまあ見る》と、

日本晴れの気持ちだった。胸がすくと、すっかり学校でのことは忘れ、その日も定刻に塾へ行った。玄関先に先生と高井君が待ち構えていた。彦一はハッとした。今更、逃げ隠れはできず、立ち尽くした。

勉強する座敷に連れて行かれると、東田先生は目をむいて怒った。

「外田ッ! お前という奴は、何と

いうことをしてくれたッ。昼も夜も一緒に勉強する掛け替えのない友に

何てひどいことをッ!」

高井君は涙ながらに彦一を睨みつけている。先生は怒りに声が震えている。

その夜は、もう来るなどは言われなかったが、先生は心を入れ替えて来いとも言わなかった。

「今日は帰れッ」

と、そっぽを向いたままだった。

次の夜、母は学校から帰るや、「彦一、お前は高井君をひどい目に遭わせたんだってッ! 東田先生に聞いて、開いた口が塞がらなかったわ。先生もおっしゃってたけど、昼も夜も一緒に勉強する仲なのに何故ッ?」

「……」

彦一は説明の仕様がなかった。言っても、この気持ちは判って貰えないなだらう……。

結局、塾の先生へは母が遠慮して辞退したらしい。

「もう行かなくていいわ」と、母は悲しげに言った。

彦一は清々した。これで、また自由には遊べる。その時が来れば入試は何とかなる、とホッとした。

母は放つて置かなかつた。西山先生という同僚の女の先生に頼み込み、教えて貰うことになった。

女の西山先生を甘く見た彦一は、いろんな手を考えた。先ず、友達を数人連れて行き、窓の下で待たして置いた。塾が始まって半時間も経たぬ内に、

「未だかい、外田、遅いなあ」

などと、勉強している部屋の窓辺で友達がワイワイ騒ぐので、彦一は、

「一人で来なさい」

と叱られた。

西山先生がお寺に下宿しているのを目を付け、彦一は考えた。お寺といえ、お葬式、法事だ。これを利用しない法はない。母に、

「今日は法事があるので休んでくれ、と言った」

「お葬式があるので休んでくれ、と言われた」

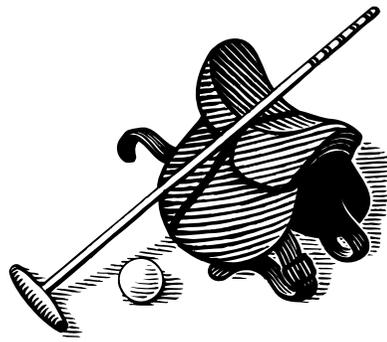
と、嘘をついて休んだ。が、五度目に露見(ばれ)、今度は、

「もう、私の手には負えません」

と、向こうから断られ、母は泣いて怒った。

「知らない。どうなつてもお母さんは知らないッ！勝手にしなさい」と、声を震わせた。

彦一は女の涙に弱かつた。《悪い事をした。これからは真面目にしよう》と、神妙な気持ちになつたが、……。



(七) 先生の子

幸か不幸か、母は訓導だつた。昔は小学校の先生を、こう呼んだ。当時の風潮として、先生の子は「品行方正で学業優等」という不文律があつた。つまり、先生の子は、お行儀がよくて勉強ができる、というのである。彦一は不満だつた。先生にも色々あり、子供にも色々あるッ！

母、英子は女学校を二年生から卒業まで、奨学金を受け、授業料はタダという特待生だつた。何時だつたか、大掃除の時、彦一が古い新聞包みを開くと、積み上げられて数センチにもなる母の賞状が出てきた。数十枚は下らない量だつた。他の賞状も混じっていたが、大部分は学業優等の証書だつた。

鬼子の彦一は勉強が嫌いで、大阪で言う「やんちゃくれ」。遊びや悪戯に生き甲斐を感じるイタズラ小僧だつた。

元は親が手を焼くやんちゃではなかつた。四年生の始め、大畑というクラスのボスをやつつけて以来、自信をもつたのである。

大畑は組中の嫌われ者だが、大柄で腕力が強く、誰も手出しできなかつた。

その日は特に執拗に彦一にからんだ。いつもの事なので、もうこれまでと彦一は相手の腹を蹴り、屈んだところを殴りつけた。窮鼠猫を噛んだのである。大畑は予想もせぬ反撃に逃げ出した。彦一は人気者になり、俺もやれば出来るんだ、という自信を得た。

以後、この貴重な体験から、彦一

は強気に転じ、前向きな人生を歩んで、何とか人並みの生活ができた、と思つている。

五十二人クラスで、彦一は中以下の二十七、八番。特に嫌いな算術(数学)は、試験で40点も取ればいい方——いつも二〇点や三〇点が関の山。答案を返して貰う時も、

「お前は先生の子なのに」

と言われる。道で立ち小便しても、喧嘩して相手を泣かせても、小遣い稼ぎに煉瓦を叩きに行つても、冬に土手の枯れ草に火をつけても、必ず、

「お前は先生の子なのにッ！」

と、他の子供よりきつく叱られる。

先生だけでなく、世間の奴らも特別な見方をする。お節介な世間は、

「彦ちゃんは、よその家の二階の屋根からオシッコしてましたよ」

「紙芝居の手伝いをして、拍子木を叩いて町内を廻つてましたよ」

「何処で掘つたのか、鉄屑を拾つて来て、屑屋に売つてましたよ」

という風に、彦一の行動は必ず母の耳に入る。

「彦一、今日は何をしてたのッ！

いつも何時もロクな事をしない。紙芝居を手伝つたり鉄を掘つたりしな

くても、家にはお菓子もあるし、お

小遣いだって決まって貰ってるでしょ。お母さん恥ずかしくて表も歩けないッ！ 情けない子ねえ、お母さんはもう知らないッ！ 入試までに一年もないというのに、どうする心算ッ！」

彦一は俯いて聞いてはいるが、明日、お天気なら久し振りに南海電車のタダ乗りでもして旅行気分を味わおうかな、と心はそこになかった。

一人っ子で可愛がられ、我儘に育った彦一は、何でも自分の思ったようになると考えていた。たとえ親がどう説明しようと、人生経験の少ない彦一には、自分を騙して勉強させようとしている、としか感じられなかった。大畑をやっつけ、《自分は、やれば出来る》という自信と、世の中はどうかになって行くものだという甘い考えとが常に肚の底にある……。要は、自分で頭を打つてみないと痛さが判らぬタイプに生まれついていたのである。

だが、世間は彦一の思っているような甘いものではない。間もなく憂目をみることになるのも知らず、彦一は遊び呆けていた。

(つづく)



街中の似顔絵師 (四)

瀧本 文彦

会う場所は渋谷の宮益坂にある「タンポポ」という店で、一階がイタリア風レストラン、二階が色とりどりの洋酒の並んでいるバーだった。そのバーで待ち合わせた。

僕は9年前、道玄坂の一階がイタリア風レストランで、二階は白いグランドピアノのある洋酒の並んでいるバーで、カンツオーネやシャンソンの歌手の伴奏を二年間程した。そこも宮益坂と同じ系列の店で「タンポポ」といった。僕は宮益坂の方を選んだ。道玄坂の店には知っているバーテンダーが居るのではない、照れくさくて避けたのである。何時に待ち合わせをしたのであろうか。午後4時だったと思う。

二階に通じる階段をトントンと上がって行くと、すでに彼女はカウンターより右側に座って居た。彼女とは面識はないが、お客様は他に居ないので彼女と分かった。手持ちぶさたの様子で俯き加減にカウンターの前に座っていた。僕が近づいて行く

と、彼女は此方を振り向いた。
「妙子さんですね」
と訪ねた。

「吉岡妙子です、よろしく」と会釈して挨拶した。

「お待たせしてすみません。何分位前に着いたのですか」

「いえ、今来たばかりですよ」

彼女はオーダーもせず僕を待っていたようだ。細っそりした体形で、顔も細面。身長155センチくらい、女性だった。物静かで恥ずかしうだった。僕は身長157センチのちびなので気にしていたが、僕が仰ぎ見るほど身長の高い女性でないのでホットした。付き合ってもらえるかな、と思った。

彼女は緊張していた。何処の何者かも知れない、見知らぬ男性と付き合うのである。しかしその様な緊張感の他に意識の底に張りつめた何かを感じた。彼女は周囲の期待に答えなければ、身内の人達に結果を示さなければ、と言う意識を絶えず持ち

続けて来たのではないか。

カウンターで僕は生ビールの中ジョッキを飲み、パーボンウイスキーの炭酸割りを頼んだ。妙子さんは何を飲んだのだろう。アルコールには弱そうだった。カクテルを少し飲んだようだ。何を話したか覚えていない。何を食べたのかも覚えていない。多分ピザや海鮮野菜サラダをつまみに僕は深酒したにちがいない。

妙子さんの第一印象は堅苦しいものだった。穏やかな環境の中で、教養の高い人達に囲まれて育ち、偏差値の高い学校を出ているな、という印象を妙子さんに持った。実際、妙子さんは東京生まれの東京育ち——高学歴のエリートを親兄弟にもつ都会人だった。

僕は紀伊半島の最南端、文化の屈かぬ辺境で育った。僕の親父は高等小学校しか出ていない肉体労働者であつた。

親父の趣味は多かった。10歳から24歳まで「関口流」という古武術を習った。急所を狙って息の根を止める荒業である。「講道館」は生かし取りだが、「関口流」は殺し取りだ、と言っていた。「初伝」の免許を取った

それで、「講道館」の四段の価値があると云っていた。関口流の技を書いた何とかの巻と言う巻き物四巻を大事に箆笥の中にしまっていた。

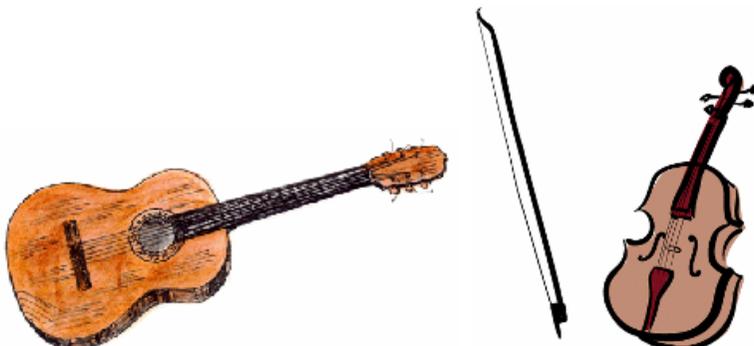


音楽も好きで、僕が小学低学年の頃、ハーモニカを吹いて聴かされた。伴奏を入れてメロディーを吹いていた。「軍艦マーチ」や「海行かば」「露営の歌」「戦友」等の軍歌だった。バイオリンやギターに熟を入れて居た事もあつたそう。バイオリンは独学だったが、ギターは先生について

習い、一ヶ月の給料を注ぎ込んで高級ギターを買った、と自慢していた。そのギターは貧窮の頃に売ってしまった、と言っていた。

将棋にも凝り、定石の書いてある本を買い、棒銀で攻めて来た時の防ぎ方の本、中飛車戦法、振り飛車戦法、矢倉囲いなどを研究していたが、家族の生活の方は貧乏のどん底にあつた。

紀伊半島の南端では仕事の種類が少なかったからなのか、自己主張が出来ず、押しが利かず、世渡りの下手な性格なのか、きつく、危険で、暗い、今で言う3Kの仕事をしていた。僕が小学校に入学する前、就職難の頃だったのか、名古屋まで仕事を探しに行き、仕事にありついたら暫く家に帰って来なかったこともあつた。失業を恐れている親父を見て、子供心に不安を感じた。



〈秋の読みきり〉

秋空にのせて

蒲原ユミニ子

すっかり秋色に染まった丘のふもとにガソリンスタンドがある。

青いつなぎを着た翔が白いカロラのお客さんに言った。

「レギュラー満タンですね、かしこまりました！」

翔はオイルのノズルを車の注入口に差しこむと、いつものようにガソリンが満タンになるまでお客さんの車をふき始めた。

ゴシ ゴシ ゴシ・・

キュツ キュツ キュツ・・

てきばき てきばき

翔はけんめいに車を磨く。だんだん車はつやつやになり、美しい秋空をカーブして映す出す。

カロラに乗った銀髪のおばさんが羨ましそうにほほえむ。

「若い人は元気でいいわね」

翔は眉をさげ、困ったように笑い返した。(仕事ですからね)

きょうは1週間に一度しかない休みの日。

翔はアパートの6畳一間に寝転んでいる。毎日朝8時から夜の8時まで働いているので、疲れきって何かほかのことをする気が起きない。

翔、23才。

ガソリンスタンドでバイトを始めてから5年たつ。

翔の夢は、クラリネット奏者になることだった・・。

小型テレビのわきに、こげ茶色のクラリネットが立てかけてある。高校時代にバイトして買ったヤツだ。安物ではあるが、いい音が出る。

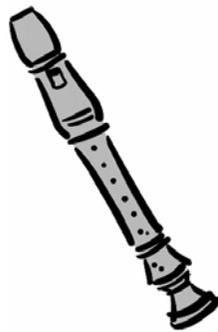
ところが、家を出て生活のためバイトを始めたらクラリネットどころではなくなった。朝から晩まで仕事、しごと、仕事になってしまった。友達とつき合うひまもない。もちろん、彼女はいいない。

小さな折りたたみ式テーブルには食べ終わったカップめん空き容器が重なっている。

夕方になってやっと翔は起き上がり押入れの中をのぞいた。そして、整理箱の奥から小学生の時に使った

リコーダーを取り出した。

きのう休息時間に近くの石段でぼうつとしていたら、リコーダーの音色が流れてきた。『茶色のこびん』だった。つかえつつかえだつたけれど、聞いていてなつかしくなった。クラリネットは音が大きくて近所迷惑だろうけれど、リコーダーならいいだろう。翔はタオルでリコーダーを拭き、久しぶりに吹き始めた。



次の日の休息时间、翔はポケットにリコーダーを入れて石段を登って行った。

紅葉した落ち葉がひらりはらりと舞い落ちてくる。

翔が働いているガソリンスタンドは丘のふもとにあり、わきに丘を登

る長い石段がある。石段のまわりにはうっそうとした緑が茂り、そばを国道が走っているのに石段のまわりは人や車の喧騒がなく、静かでやさしい空間が広がっている。ほんの近くにスロープのついた階段ができてからこの石段を使う人がほとんどいなくなつた。だから、翔のかっこうの休息所になっているのだ。

いつもの中ほどの場所におろすと、翔はさっそくリコーダーを取り出し吹き始めた。

ミソラー フアラシシー

レドミソファー ミミレド・・

小学4年生のとき、この『エーデルワイス』を吹いたら、担任の先生に、

「翔くん、すばらしいわ！ こんなにきれいな音色を出せる人はめったにいないわ！」

とほめられた。それから吹奏楽部に入り、18才までずっとクラリネットを吹いてきた。

家の人には、「クラリネットを食べたいけるわけがない」と反対された

が、翔はすめられた会社に就職しなかった。

けれど、高校時代のバンド仲間は大學生かサラリーマンになって音楽をやめてしまった。

翔もクラリネットを吹いてお金を稼げるところがなくてガソリンスタンドでバイトを始めたなら、音楽どころではなくってしまっただけだ。

翔は石段で立ったままリコーダーを吹き続けた。やわらかいけれど張りのある音色が秋空に流れていく。

午後の休み時間になると、翔は石段でリコーダーを吹くのが日課のようになった。まわりの風に自分の音色が合わさり気持ち清々しくなるからだった。

そんなある日、ランドセルをせおった女の子たちが石段を登ってきた。翔は女の子たちが通り過ぎてから吹こうとリコーダーをやめた。

ところが、女の子たちは通り過ぎないで、翔の前で立ち止まった。そして、目のくるりとしたかしこそうな女の子が翔に話しかけた。

「リコーダー、吹いてもらえますか？ あたしたち、あんまりきれいな音色なのでわざわざこの石段にきたんです。通学路ではないけれど」

翔はおどろいた。うれしいというよりこんなにしつかりして可愛い女の子たちの前で吹くのは恥ずかしい。まごまごしていると、女の子たちは言い合った。

「あたしたち、石段の上のぼつちやった方が吹きやすいんじゃないかしら」

「やっぱり、下より上の方がいいわよね」

それなら、オッケー。翔は女の子たちにうなずいた。

それから、午後の休息時間は、翔の待ち遠しくて楽しい時間になった。人が通らない日もあるけれど、買い物袋を下げたおばさんが来て聞いてくれたり、小さな子をつれた若いお母さんも通るようになった。立ち止まるよりゆっくり石段を登りながら聞いてくれる人が多い。

初めてお客になってくれた女の子たちも時々やって来る。翔のリコーダーを聞いた人たちは、みんなゆつたりとした笑顔になって帰って行く。

「じょうずねえ」とか「ありがとう」とか言って。たった十五分だけれど、この石段での演奏会が翔の生きがいになっていった。

ある日、翔に初めて声をかけた女の子が聞いた。

『ドレミの歌』を吹いてもらえますか？」

翔はリクエストされて嬉しかった。楽々吹ける曲だし。けれど、あと少しで休息時間が終わる。でも、走って帰ったら間に合うだろう。翔は吹き始めた。

終わると、女の子たちは喜んで拍手してくれた。翔もとても嬉しかった。急いでリコーダーをしまおうと石段をかけおりた。

スタンドに着くと、ガソリンを入れるために車が3台とまっていた。パートのおばさんが忙しそうに走り回っている。社長が不機嫌な顔で洗車をしている。翔は5分遅れてしまったのだ。

翔は二人に「すみません」と謝り、待つている車のオイルを入れ始めた。午後8時を大分回って、翔が帰ろうとした時に、社長が言った。

「休息時間を守ってもらわないと困るよ。他の使用人に示しがつかん。それに、音楽が近所迷惑になったら、商売にさしつかえる」

「すみません」
翔は頭を深く下げた。翔は毎日勤務だが、パートのおばさんたちは5

人で交代でやっている。正社員は一人もいない。

翔はアパートに帰ってからも気持ち治まらなかった。5分遅れたのは悪いけれど、今日はそのぶん一所懸命8時半まで働いた。しかも、もともとは8時から5時までなのに、いつも3時間もオーバーして働いているのに……

けれど翔は考えた。自分のリコーダーを喜んで聞いてくれる人も多いけど、うるさく感じる人もいるだろう。ガソリンスタンドの仕事は嫌いではないけれど、一生の仕事ではない。今のところ、スタンドをやめたら食っていけないしなあ。

翌日から翔は石段へ行かなくなつた。休息時間は近くのコンビニに入つてつぶした。

今日は日曜日。空が高く澄み、からりと晴れ渡っていた。

翔は青いGMをせっせと磨いていた。もつとピカピカに美しくしてやる。

オイルを入れている間、GMからおじさんとおばさんが出てきて、青

空の中の丘を見上げた。

「今日は気持ちのいい秋晴れだ」

「行楽日和ね」

おばさんが笑顔で翔に声をかけた。

「あなた、笛のお兄さんでしょう?」

翔はあいまにうなずいた。おばさんは聞いた。

「このごろ、笛を吹いてくれないわね、いそがしいの?」

翔は困った。すぐ後ろに社長がタイヤの圧を計っている。

「はあ、まあ・・・」

おばさんが頼んだ。

「また吹いてね。わたしらの家、近所なのけど、あなたの吹いたメロディが風に乗って流れてきて、とても素敵なのよ。近所でも評判よ」

「はあ」

翔は嬉しくて、顔が赤くなった。

おじさんが言った。

「僕も若いころ、ギターを一生懸命やっただけだな」

おばさんが軽くいなした。

「あなたは女の子の気を引きたくてやっただけでしょ」

「それはもちろんだよ」

「志が低いのね」

「仕事の方が面白くなっちゃったんだよ」

翔は二人の会話を聞きながら考え

込んだ。

(ぼくの志はどうなっちゃったんだ・・・)

夜8時過ぎて、帰ろうとしていた翔に、社長が笑顔を作った。

「時間さえ守れば笛を吹いていいんだよ。他のお客さんにもまた吹いてくれと頼まれたことだしな」

「はあ」

翔は思いがけなかった。音楽に無関心な社長でも、お客さんの声には弱いんだ。自分の知らないところで自分のリコーダーを聞いた人がいて、社長にまで言ってくれたんだ。

一週間に一度の休みの日が訪れた。

翔は珍しくご飯を炊き、味噌汁を作って朝食をしつかり食べた。それがすむとクラリネットを袋に入れて背負った。

自転車に乗り、利根川の遊水土手に向かって思い切りペダルをこいだ。秋空に向かって翔の姿が、力強く進んでいった。

ピアノ (1)

中井豊

ピアノを初めて見たのがいつかは、どうしても思い出せない。それくらい音楽にたいする関心が乏しかったのだろうか、あるいは誰しもそんなものなのか。

小学校の音楽の時間、先生がピアノをポーンと鳴らし、

「何の音?」

と訊ねる。すると、お嬢さんのような雰囲気の生徒が、

「ミ」

と答える。また、別の音が叩かれる。女生徒の誰かが、

「ラ」

と言う。私には何をしているか皆目わからず、厭になった。何やら反撥のようなものを覚えるだけだった。《男には関係ないや》と思いつつも、答えられることが不思議であり、気懸かりではあった。お嬢さん生徒はピアノも弾くことがあった。

中学生になった時、三歳下の妹がオルガンを習い始めた。家には

オルガンはなく、紙に印刷された鍵盤で練習していた。馬鹿々々しい気がした。間もなく妹のやる気も失せたようだった。

中学校では音楽の先生は若い男性だった。新任だったかも知れない。確か、その先生は隣のクラスを担任していたが、二学期に入ってから休職した。可愛がっていたクラスの女生徒に冷たくされた所為だという噂もあった。その真偽は兎も角、急遽ベテランの社会科の安川富春先生が音楽を教えることになった。

先生は自分の伴奏でできる滝廉太郎作曲の「秋月」とか何とかいう曲を教えて下さった。時間割の関係でか、音楽室でない空き教室で、その部屋にもあったピアノでなく、足踏みオルガンに向かってガタガタと伴奏された。休憩時間に指だけを動かして練習しておられる姿も覚えてる。遠い日のかすかな記憶である。

音楽室での授業で、或る旋律を
与えられ、終わりの小節をつけよ、
という課題が出された。安川先生
は、

「出来た者から終わってよろし
い」

と言われた。終止形の勉強だった
と思う。私は型どおりの簡単な旋
律を一小節か二小節だけ書いて
一番に仕上げた。ただ、最後の部
分を「シ」「ド」になるようにし
ただけだった筈だ。どんな音にな
るかは判らなかつた。否、どんな
音になるか想像することさえ、思
いも寄らなかつた。

或る放課後、どういう訳か、私
は音楽室にいた。勝手にレコード
をかけていたのかも知れない。若
い男の先生が二人——一人は巨
漢で、もう一人はとても小柄だつ
た——入って来て、代わる代わる
ピアノを弾いて遊び始めた。ある
いは、ピアノの音が聞こえて来た
ので私が音楽室へ入って行った
のかも知れない。二人は教員にな
るためにはピアノをやる必要が
あり、それで弾けるようになった
ということだった。《音楽の先生
でなくても、男がピアノを弾いて
楽しめるんだ》と思った。

安川先生は愉快な先生だった
ので、毎週のように、夜、ご自宅
へ話しに伺った。岩波文庫の目録
を持参して、「読むべき本」に丸
印をつけてもらいながら、
「マルサスの『人口の原理』あた
りから読んだらどうか」
と助言された。先生は『空想から
科学へ』などの社会科学の本も読
んだが、中里介石の『大菩薩峠』
は全部読んだ、と笑っておられた。
私が神経質になっていると見て、
「ウイスキーが半分以下なら紅
茶だという判例がある」
と仰りながら、いつも紅茶にウ
イスキーをたっぷり入れて飲ま
せて下さった。

「音楽は判らなくて……」
と言うと、

「いや、君はちゃんと声を出して
歌っているのが聞こえていた」
と励まして下さった。

家にあつた妹の「バイエル」を
持参して、空き教室のピアノを開
け、ひとり練習してみたことも
ある。安川先生の影響以外に、そ
の頃には、親しかった池田志都雄
君と一緒に彼の家のレコードを
聴き、クラシック音楽を楽しむよ
うになつていたと思う。

高校では芸術が選択科目にな
つていた。音楽、美術、書道のい
ずれかを選択するのだが、私は音
楽を選択した。

音楽の先生は無表情で風変わ
りだった。ピアノでベートーヴェ
ンの「月光ソナタ」や「熱情ソナ
タ」を一寸弾いて聞かせて下さつ
た。速い箇所では髪を振り乱して、
必死に弾かれた。先生は音楽が専
門だということで、合唱部を指導
しておられた。

数学の佐藤幸平先生は喜怒哀
楽を顔に出して憚らない先生だ
つた。毎時間、謄写版刷りのプリ
ントを宿題に出され、提出すると
必ず次の時間に添削して返却さ
れた。私は面倒なので殆ど提出せ
ず、線形代数を独習したりしてい
たが、先生は意に介されず、相談
相手になつて下さった。

高校には定時制もあつた。或る
夜、音楽室で、ひとりレコードを
聴いていると、佐藤先生が入って
来られて、ピアノを弾き始めた。
しばらく聞いてみると、

「やかましいやろ」

と言われた。それは「ハノン」だ
つたと思う。そして、音楽全集を

引つ張り出し、
「好きな曲なんさ」

と言いながらヨハン・シュトラウ
スの「ウイーンの森の物語」を弾
き始めた。ペダルを打楽器のよう
にガンガン踏みながら全曲通し
て弾かれた。聞いていて、《数学
の先生がピアノを弾くというの
も愉快だなあ》と思った。



青い波濤と白い龍

第五回

藤川博樹

■ 大会・黒牟田

合宿のレクリエーションで、ソフトボールをやったあと、上野たちが公園にあった吊り輪にぶら下がっている、牟田がやってきて、俺にもやらせろと言って上野を押し退けた。常三はその男を見て、圧迫感を受けた。牟田は、色が黒く目つきが鋭く大柄で、腕も胴も足も太く、髪は大きな頭にオールバックにしていた。膝までの黒い短パンをはいていて、首には汚れた手拭いを巻いている。前の執行委員にやはり牟田という色の小男がいて、区別するために黒牟田と呼ばれていた。

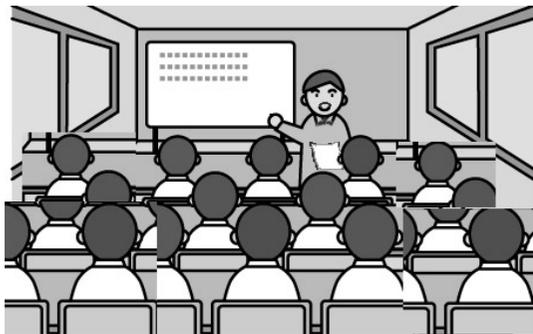
黒牟田は吊り輪で懸垂をやり、大きなお尻をぶらぶらさせて満足すると、合宿所である民宿へ向かって行

った。牟田は人を自然に押し退けてしまうような圧倒的な存在感と、目つきの鋭さで、何か腹黒い悪意を隠しているのではないかという印象を人に与えた。常三は、黒牟田との出会いに弦楽器の下降していくピチカートに始まる旋律を聞いた。ブルックナーの五番の序奏である。それは長く暑く単調な夏の予感だった。

合宿が終わると、翌日はすぐに都学連の大会が開かれ、常三たち合宿参加者は予定通り全員執行委員に選ばれた。合宿は、大会での討議と決議の準備でもあった。

牟田は、都学連の大会で副委員長に選ばれた。常三たちは、各大学の推薦で集まったが、大会では正式に選挙で執行委員に選ばれる。対抗馬が出ないので、実質的に承認投票だ。候補者は壇上で紹介されるが、はじ

めてみる二十数人の人間の信頼性を見抜くことなど誰にもできない。見た感じの印象で判断するしかない。顔や全体の雰囲気を見れば人格は判断できると人々は思いがちだ。現に国政選挙の投票はするように判断して投票されている。人の印象や記憶、勘ほど誤りやすいものはない。



牟田は、議事を進める議長の役をやっていた。三役の副委員長をやることになっているのが大会参加者全員に示され、参加者はそのことをはっきりと理解していた。投票用紙が配られ、代議員は立候補者のリストに丸を入れていくだけである。選挙が終り、結果は信任数が発表されていく。対立候補がない選挙なので、拍手で確認していくだけの儀式的なものであり、会場のホールに鳴り渡る大きな拍手というのは、一種の景気づけでもある。信任数の発表が牟田のところ差しかかった。ところが牟田だけ目に見えてはつきりと信任数が少なかった。他の候補は、二三〇前後といったところで、ほぼ代議員全員の承認を得ているのだが、牟田だけ二〇〇を大きく切っていた。会場にいた三〇〇人近くの大会参加

者は議長の牟田を見た。拍手の数は明らかに少なく、会場はしずかになつて他の候補者と異なる雰囲気にもまれた。本人の牟田は動揺しただろうが、その様子は少しも見せず、かえつて大きな黒い頭を会場の天井にむけ、ギョロツとした目でにらみつけた。

人間を外見で判断することの難しさを黒牟田ほど常三に教えてくれた人間はいなかった。牟田が彼をよく知る仲間うちでは高く評価され、信頼され、正義感にあふれておのれの信ずることをエネルギーに実行する人間であることを常三は何ヶ月も後になつて知った。

七月の暑い日、京都で全学連大会が開かれた。常三たちは東京からの代議員たちを組織して参加した。会場の会館は暑く、岡本全学連委員長の大合唱はブルックナーの一時半もかかる交響曲第五番のように長く単調で、初めて聞いた人間には複雑すぎて理解できなかつた。冗談も

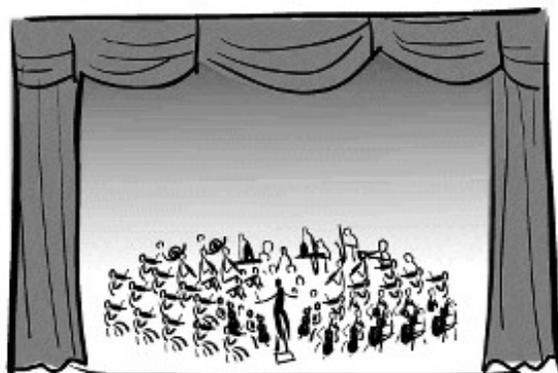
メリハリもなく、ただ書かれた長い長い報告書のプリントを読んでいくだけの報告に、常三は眠気を抑えることができなかった。冷房の効かない暑い会場に座つて、うつらうつらしていた常三が気付くと、書きかけの白いノートに青いサインペンの先が接触して、インクが水たまりのように染みだしていたりした。眠りの中で、委員長のささやきがブルックナーのうねるような旋律となつて続いて果てしなかつた。

委員長は、大会報告と大会決議の提案をし、世の中を騒がせていたロッキード疑獄事件を糾弾した。壇上の副委員長席にすわつていた、増村という小太りの精悍でエネルギー的な男が、委員長の報告の節目や、大会参加者の発言のたびに、「よしっ！」と強い声で合の手を入れ、雰囲気盛り上げ、そのたびに拍手が沸き起こつて常三は目を覚ました。大会二日目になり、ブルックナーの交響曲の四楽章、複雑な二重フーガ

の連鎖も解決され、大会もいよいよ終わりにさしかかつた。交響曲の最終のコーダが近づいた。増村副委員長が立ち上がつて、「さきほど、ロッキード疑獄事件の容疑で元首相の田中角栄が逮捕されました」と報告した。元総理大臣の逮捕ということ、

歴史的な事件を目の前に見たという興奮に、会場にいた千人に近い参加者は猛烈に拍手し、おうつという叫び声が会館の高い天井にこだました。常三の中で、会場の反響音の中に、ブルックナーの交響曲の集結部、すべての弦楽器と打楽器、とりわけ金管楽器の全奏、オーケストラの圧倒的なトウツティが鳴り渡つた。劇的事件の報告者、増村副委員長は次期の全学連委員長に就任した。

その時、常三はブルックナーの全交響曲のなかでも地味で単調で長く複雑な五番こそ、すべての交響曲の中で最高傑作であることを理解した。



わしらの階Q

蒲原直樹

赤田健太はその日の午後、久しぶりに大学時代の先輩と会った。赤田はフリーのフォトグラフィアー、先輩は小さな出版社の共同経営者だった。昔は何度か一緒に仕事をすることもあったが、この数年は年賀状をやり取りするだけの付き合いになっていた。それが突然、携帯電話に

「今ひまか？ちよつと出て来いよ」

という呼び出しがあつて、隣り町の杉戸市から車で足賀沼寄りの田園地帯にある混沌市甚兵衛新田までやってきたのだ。混沌市もこのへんに来ると草深い農業地帯だ。

「おう、元氣そうじゃないか、急に悪かったな」

先輩、千石大悟は軽く手を振って合図した。めつきり白く薄くなった頭に、昔のようにパンダナを巻いている。彼は赤田の三年先輩だが、実年齢はさらに上のはずだった。赤田が新入生の頃は自治会の書記長を務めていた。

「じつはなあ、オレの百姓仕事も油

がのつてきちまつてさ、いよいよ生協と提携して大量出荷するところに来てるんだ。それで商品見本つてえか、畑や野菜のいい写真が必要になってきたんで、そいつをおまえさんに頼もうかと思つたんだ」

「そんなことくらいおやすい御用ですよ。それにしても本格的ですね、会社のほうはどうなつてるんですか？」

赤田は古ぼけた曲がり屋と農器具と農作物で雑然とした庭を驚きの目で眺めた。作りかけの風車や発電機、ソーラーパネルも青いシートを被せただけで無造作に並べてあつた。

「去年、共同経営権を放棄した……」

千石はちよつと寂しそうに言つた。「定年には間があるが、後進に道を譲る決心をしたんだ。あとは相棒がよろしくやるだろう……まあ、この出版不況の中だから、残る方も大変だ」

「そうだったんですか」

「氣の毒そんな顔をするなよ、オレ

は今の生活に満足しているんだ」

千石はカラカラと笑つて言つた。

それから案内された田んぼと畑はかなり広く、ビニールハウスや大きなサイロもあり様々な作物が栽培されてきた。千石自身は都内の下町出身なので地面に縁がなく、全て千石の妻の実家のものだった。その義父母も義兄も今は亡く、千石一家の自由のきく田畑になつていらいらしい。

早くに離婚し、相続する土地・財産など何もない赤田には羨ましかった。

「問題は税金くらいかなあ、トマトやキュウリを売った利益なんざ微々たるもんだから。ほとんど自給自足で、ほかにや金なんかいらんのだけだな」

赤田はそう話す千石の姿も含めて、手当たり次第に写真を撮つた。しかしやつて来たのが秋の日の午後だったせいもあり、周囲は急速に暗くなつた。

「撮影は明日にして、一杯飲もうや」

千石にそう言われて赤田に反対す

る理由はなかつた。

「結局、オレたちは反動にイニシヤ(タイプ)を渡してしまつたんだ……」

内部は山小屋風に作り変えてあるリビングで、千石はもう何杯目かわからない芋焼酎のお湯割りを傾けながら言つた。

「同世代がみんな百姓になつてる。EMだ自然農法だ、地産地消だエコロジーだつて言いながら……だが、ほんとは政治活動や文化活動が空しいんだ。いくら頑張つても成果があらぬ、笛吹けど踊らず、だ。つまり後継世代を育てるのに失敗したオレたちはそれを痛苦に自己批判するべきだろうな」

千石は湯のみを下ろし、遠くを見る目をした。たしかに彼らが学生だった時代とは大きく変わり、若者の保守化は著しい。タカ派の総理大臣のあとには超タカ派が就任する。自衛隊は海外で武器を振り回し、本土

の米軍基地が増強され、日本全土が沖繩化しようとしている。それなのに学生・若者の反対の声がほとんど聞こえてこないのだ。赤田にもそれはよくわかったので黙って頷いた。

「なあ、最近よく考えるんだが、オレたちは今でもプロレタリアートなのかなあ？」

だんだん酔いが回ってきた耳の奥に、そんな言葉が飛び込んで赤田は驚いた。

「……ボクはあんまり考えたことないですが」うめくようにつぶやく。

千石は中空をにらみながら言った。「農民はプロレタリアかプチブルか、そんなことがオレたちの間で話題になったつけ……労農同盟といったって結局、ソビエト政権は農民を搾取しないとやっていけなかった。だから小作農以上の農民はプチブルだということにされた。作物を徴発された農民は頑固に抵抗して、ソビエトの敵になってしまった……」

そこで千石はやつと目を手元に落とした。

「その伝で行くと、農民になったオレたちはプチブルということになる。意識の高い、誇りあるプロレタリアートになれなかったオレたちは、今

では軟弱なプチブルに成り果てたということになるかな？」

赤田がポカンとしてしばらく絶句している、千石が笑いながら彼の肩を叩いた。それで赤田も少しほっとした。

「ボクは一度も自分をプロレタリアだと思ったことはないですね……それにプロレタリア革命が必然だと思つたこともない……」

赤田が考え考えそう言うと、今度は千石が黙つた。

「ボクは関係ないアジアの国にのさばって爆弾を落としているアメリカが嫌い、それに追隨する日本政府が嫌いだけだ。革命でこの国が変わってくればいいけど、ソ連みたいになったら困るな、と思つていた。高度経済成長でみんなが豊かになって、革命がいらなくなったんならそれも仕方がないかな、なんてね」

赤田は千石が作ってくれないので、空になった湯のみに自分で焼酎とポットの熱湯を注ぎ込んだ。

「プロレタリアが存在するという事実と、それが革命的であるという話とは別でしょう。プロレタリア革命が必然だというのは信仰だ。階級闘

争という信仰が信じられなくなったら、プロレタリアも存在しないことになる。今の若い人たちに階級闘争の必然性と言つたつて、信じさせるのは難しいでしょう、そういう意味の後継世代を育てられなかったのは仕方がないんじゃないですか」

赤田は舌を焼くようなお湯割りをすすつて一息ついた。

「ボクは信仰心なんかはないほうがいいと思う。セクトの連中なんか、平気で人をテロつた。テロや殺人を合理化する信仰なんてろくでもないじゃない……自然農法や自然エネルギーはそれに比べればずっとまともですよ。信仰ではなくて、自分たちの生活実感から入っているんですから。プチブル農民、けっこうじゃないですか、先輩の生き方は間違つてないかい」

赤田は千石の湯のみにもお湯割りを注いだ。

「物作り担当のプロレタリアは中国、それを消費するだけの日本は一億総プチブル、そういう国際分業になつたんです。わしらはプチブル、君らもプチブル、大ブルジョアにはなれないが、なんにも羨ましくないぞつて、そう思つてりやいいんです、

違いますか？」

赤田はそう言つて笑つた。しかし千石が座つた真つ赤な目をしているのを見逃した。

「出て行け」

「は？」

怒鳴られてようやく赤田は先輩の怒りに気づいた。

「今すぐ出て行け、おまえなんか同志じゃない、先輩後輩でもない、出てうせろ！」

千石が殴りかかろうとするのを家人の誰かが停めていた。何がなんだかわからないうちに赤田は表に放り出された。そして自分の車の後部座席で寝る羽目になった。初秋の夜は寒く、酔いが醒めてきた体にはかなりこたえた。しかし三〇分もすると千石の家の者が呼びに来て、彼はなんとか暖かい布団にありついた。

(日本のプロレタリアが将来、信仰でなく、実感から階級意識を持つことがあるだろうか？……もつとも、彼らはどんなに不満でも革命よりはファシズムを選びそうだなあ……)

赤田健太は布団の中で先輩の闇雲な怒りを思い出し、あらためてそう思うのだった。

紙芝居のほんわかたのしい世界(2)

蒲原雅人

■タイトル

「ふしぎなうりどろぼう」

■作者

脚色・水谷章三

絵・宇夫方隆士

■制作

NHKS・S

■発行

学習研究社

●好感度

○文 ★★

○絵 ★★

○反応 ★★ ★★ ……小3年

■今昔物語から児童向けに脚色されたもの。お菓子というものが昔は

くだものことだった、ということ

を、現代の子どもたちに判ってもら

うのによい教材だと思う。そのため



味というやつを強調して子どもたちの想像力を掻き立てないといけない。「めっちゃうまなんだぞー!もうスパーで売ってないぞ」

■タイトル

「ジョンのゆめ」

■作者

文・岡上鈴江

絵・工藤市郎

■制作・発行

教育画劇

●好感度

○文 ★★

○絵 ★★ ★★

○反応 ★★ ……小3年

■たいへんな技術をもった絵描き

さんだが、下の絵なんかパースを無視してある。資料がなかったんだらう。まあいいんだけどさ。この手の話に教育的な意味をもたせたりするのはまちがいで、世の中、地道に生きていけば宝くじに当たることもある、ぐらいにしといた方がいいだろ

う。ヨーロッパ社会のキリスト教的な信心や愚者の聖性などの背景は、

日本にも多少かたちを変えて存在する。しかし、この話はちよっと即物的。

的。

